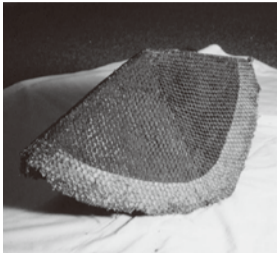


柳沢公民館 柳沢1-15-1 ☎042-464-8211 kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp  
田無公民館 南町5-6-11 ☎042-461-1170 tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
芝久保公民館 芝久保町5-4-48 ☎042-461-9825 shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp

谷戸公民館 谷戸町1-17-2 ☎042-421-3855 yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
ひばりが丘公民館 ひばりが丘2-3-4 ☎042-424-3011 hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp  
保谷駅前公民館 東町3-14-30 ☎042-421-1125 ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

① 蓑山笠

江川太郎左衛門が農兵を設置した際に、西洋銃の使用を前提に考案した笠。陣笠とフランス軍の帽子を折衷した形をしている。農兵隊頭取が使用したものと考えられる。(画像提供：西東京市教育部社会教育課)



② 村野家住宅に残る床柱の傷  
一揆勢が村野七次郎家を農具で打ち壊した際についた傷。現在に至るまで修繕せずに残しているという事実、村野家歴代当主の一揆勢へのおもいを汲み取ることができる。(画像提供：顧想園サポーター・郡司恒夫氏)



③ 「玉なし鉄砲順番帳」

宝永二(1705)年に将軍・徳川綱吉による一連の生類保護政策の一環で、下保谷村が犬を預かった際、狼除けのために鉄砲が支給された。本史料は、その翌年に作成された使用記録。表題の通り鉄砲には弾は込められず、あくまでも動物除けの「農具」として用いられた。(画像提供：西東京市中央図書館地域・行政資料室)

特別紙面講座

ふるさとむかし探訪

第三回

それは革命か暴動か、それとも：  
— 武州世直し一揆と幕末の農民たち —

行田健晃

これまで見たように、江戸時代の田無・保谷の人々は、さまざまな条件や社会の仕組みに支えられ、全体として安定した生活を送っていました。しかし、この仕組みは完全なものではなく、幕末に限り限界を迎えます。最終回の今回は、その象徴ともいえる大事件—幕末にこの地域を巻き込んで起きた一揆についてお話ししたいと思います。

「勢焰」は秩父の山間より

武州世直し一揆(武州一揆)一慶応二(一八六六)年六月に巻き起こったこの一揆は、「世直し」を叫ぶ秩父郡上名栗村(現飯能市)の貧民たちによる飯能村(同)での打ちこわしに始まり、鎮庄までの七日間で南は多摩川流域、北は上野国(現群馬県)南部まで広がりました。打ちこわされた家屋は二〇〇カ村で五

みなさんの中には、農民たちが集団で権力者のもとに押し寄せる一揆の姿に、「革命」のよ

うな印象を持つ方もいるかもしれませんが、最新の研究はこうした見方からは大きく転換しています。江戸時代の村は助け合いによる生活保障の構造を持っていたが、支配者たる武士(領主)は、その上に立ち、農民を苦しめるのではなく、農民のために働くべき存在とされました。そして、農民はその「恩」へ報いるために年貢を納めていたのですが、一揆は、領主が「約束」に違反し、農民の生活に無理が生じたときに彼らが

治安の悪化と一揆の変質

それには、当時の社会状況が関係しています。農民たちの間で貧富の差が大きくなってきた

一八世紀末から、江戸や関東では村を離れ、博打を生業とする無法者による治安の乱れが大きな社会問題となりました。これと歩調を合わせるように、一九世紀頃から一揆の中に作法を破って放火や窃盗をするものや、領主ではなく裕福な農民を主なターゲットにするものが現れたのです。そして幕末、開国によって物資が輸出されると物価は高騰し、貧しい人々はさらに生活が苦しくなって多摩の治安は悪化しました。

武装する農民、鉄砲の姿貌

もちろん、裕福な農民たちも治安悪化を前に手をこまねいていたわけではありません。彼らの中で剣術の訓練が盛んになった一方、幕府も文久三(一八六三)年には田無・保谷を含む一帯の農民に無法者を捕らえることを命じる触書を出しています。そして同年、軍事に精通した代官・江川太郎左衛門の支配とな

りませんでした。幕末に至って鉄砲は農民から人に向けて武器へと変貌したのです。

向かうは田無村・下田家

武州一揆は、このような状況で貧民が起こした「決死の訴願」でした。一揆勢は六月十六日、向かう先の農民を脅して味方につけ、各地を打ちこわしながらこの地域に迫りました。そして、彼らの次なる狙いは、田無村名主下田半兵衛と有力な農民たち—田無村の人々は、一揆の恐怖と真正面から向き合うことになったのです。

「見かけ次第打ち殺すべし」

一方で、農兵全体の動きを統括していた江川太郎左衛門には、この一揆の別の側面が見えていました。江川は、一揆勢の最終的な目標の中に横浜の打ちこわしが含まれているという情報をつかんでいたのです。これは、横浜の開港が物価高騰の一因だと一揆勢が考えたためですが、幕府の重要な施設への襲撃は、幕府の役人である江川からすれば、絶対に防がなくてはならない事態でした。

新たな時代へ

武州一揆の展開は、貧民たちがこれほどの行動を起こさざるを得なかった点、富裕な農民が本来救うべき存在である貧民と武力衝突を起した点において、江戸時代の社会の仕組みの破綻を象徴するものでした。この破綻の感覚は、直接の標的にはならずとも、同じように一揆の恐怖に晒された保谷地域の人々にも共有されたに違いありません。

ためらいと憐れみ

この時の戦いについて、江川代官所の記録に注目すべき記述があります。それによれば、この戦いに本当に積極的に参加した農兵は一部であり、残りの人々はその光景を遠巻きに見ているだけだった、ということです。

柳窪村・村野家での戦い  
そして、最悪のシナリオは、現実のものになりました。一揆勢が柳窪村(現東久留米市)名主の分家、村野七次郎家を打ちこわしているところに、田無の農兵など約一五〇人が乗り込み、戦いが始まったのです。農兵た

ちは鉄砲を射掛け、刀で斬り込み、激しい戦闘の末に一揆を鎮圧しました。一揆勢八人が亡くなり、八〇人以上が負傷する凄惨な戦いでした。村野家の住宅には今もその時につけられた柱の傷が残っています。